

作物名：こまつな

病害虫名：白さび病（病原：*Albugo macrospora*）



葉表の病徴



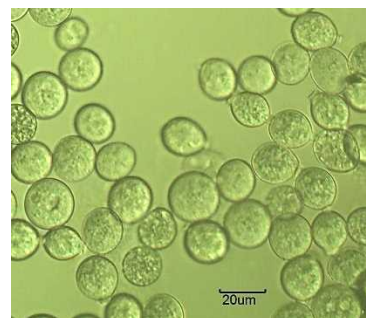
葉裏の病徴



白色の分生子層

### 1 被害の特徴と診断のポイント

- ・葉と葉柄に発生する。
- ・葉の表面に淡緑色～淡黄緑色の小斑点を多数生じ、その裏面の中央には乳白色でやや盛り上がった菌体（分生子層）を形成する。
- ・分生子層を覆う表皮が破れると白粉状の分生子が表面に現れる。
- ・白粉を顕微鏡観察すると、無色～淡黄色で、球形～垂球形の大きさ  $14\sim 24 \times 10\sim 22\mu\text{m}$  の分生子が多数観察される。
- ・罹病葉は病徴が進行すると病斑周辺から黄化し、葉縁の黄化もみられる。
- ・子葉や本葉が展葉はじめの小苗に発生すると苗立ち枯れを起こす。



白さび病の分生子

### 2 伝染源及び伝染方法

- ・本病菌は、アブラナ科野菜の罹病組織内や罹病残渣中で卵胞子の形で生存することが推察され、これが第一次伝染源になると考えられる。
- ・感染植物上に形成された分生子が飛散することにより二次伝染を繰り返す。感染は、宿主植物上に付着した分生子の内部で分化した遊走子が、宿主植物表面の水滴中を移動、発芽し、気孔から侵入することにより起こる。

### 3 発病・伝染好適条件

- ・本病菌は糸状菌の一種で、べん毛菌類に属し、分生子（胞子のう）とその内部に遊走子を生じる。本種は分生子のほかに卵胞子を形成するが、こまつなでは卵胞子の形成は確認されていない。
- ・感染は  $2\sim 25^{\circ}\text{C}$  で起こり、適温は  $12\sim 20^{\circ}\text{C}$  であり、感染してから白色の分生子層を形成するまでの期間は  $7\sim 10$  日である。
- ・本病は露地栽培で発生が多く、多湿、特に連続降雨は発生に好適であるため、梅雨期と秋雨期は多発しやすく、反対に夏季の高温期や冬季の厳寒期には発生が少ない。

### 4 防除対策

- ・一度発生したほ場では、毎年発生することが多く、発生時期もほぼ一定しているので、初発を見逃さないよう注意するとともに、発生初期のうちに薬剤防除を実施する。
- ・常発ほ場では、メタラキシル粒剤等の殺菌剤を土壌混和するか、他の土壌病害虫と併せて土壌消毒を実施する。
- ・降雨や多湿状態が続くと急速にまん延するおそれがあるので、速やかに薬剤防除を実施する。

### 5 出典

- (1) 参考文献：日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）、農業総覧原色病害虫診断防除編3-①（農文協）、農業総覧病害虫防除・資材編3（農文協）
- (2) 写真：宮城県病害虫防除所撮影